慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	寺前, 典子(Teramae, Noriko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.174- 175
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

寺前　典子

最初に、書評対象書として拙著を取り上げて下さった編集委員会の先生方、そして社会学のみならず音楽の専門的な観点から今後につながる鋭くも温かな書評をご執筆頂いた岡崎宏樹先生に感謝申し上げます。謹んで、執筆の二つの意図を説明しながらリプライさせて頂きます。第一は、社会学において埋没しかけている宝を掘り起こしその原石に磨きをかけること。第二に、人間研究が音楽の視座からも可能であることを示すことにあります。

まず、評者が冒頭でおっしゃる様に「音楽の構造と社会の構造は直接的な対応関係にない」ため、「音楽は社会学的に研究するのが難しい」。また音楽の本質は鳴り響く音にあるが、その肝心の分析は音楽学に任せ、社会学はそれから距離をおいてきた。なぜでしょうか。それは、音楽が余暇的側面をもつ割に記譜法という一見厄介な特殊言語を用いるため、それを習得しても領域を超えて他の社会問題の解決に役立つわけではないからかもしれません。

ユダヤ人の両親のもとボヘミアで生まれたオーストリアの作曲家・指揮者であるグスタフ・マーラー（1860-1911）は、自身をボヘミアンと呼び「3 重の意味で故郷がない人間だ」（船山隆 1987：19）と述べたが、社会学における音楽もまた、居場所が定まらないという点で同様かもしれない。社会学は、マックス・ウェーバーが著した『音楽社会学』（故郷）があるにも拘らず、その細部への巡礼を殆ど行なってこなかった。それは、誕生が大して喜ばれていないかのように不遇な地位にあった。このように、正統派出自にもかかわらずその二次研究が少ないことに物足りなさを感じ、議論の手掛かりとなるものを生み出したいと考えました。しかし、拙著が大阪の J 書店では社会学コーナーに、K 書店では楽譜コーナーに配架されているという現実を目の当たりにし、そのボヘミアン的な存在が象徴するように「音楽も社会学の一手法」という認識はまだ確立されておらず、著者の目論見は途上にあるようです。

また第二の、音楽の視座からの人間研究の可能性の提示は果たされたでしょうか。社会学は、一つには人と人との関係性に目を凝らして、自然の一部である人間という生を探求する学問ですが、拙著は等閑視されてきた音楽を手段としてそれを炙り出すという試みでもあります。たとえば、胎内で母のリズムと共にあるわれわれは、生み出されるや社会化を強いられる。まず、生命維持の行為は胎児時代に羊水を飲むことで練習したが、それも新生児となっては病院が定めた授乳の時間割によって区切られるため、もはや気儘に行なえない。それに戸惑いつつもやがてわれわれは、成長につれ学校や職場の時間割に合わせて行動を器用に調節してゆく。その時間割は普遍時間に基づくため、われわれは地球上の様々な人と約束をすることができる。そして、拙著の議論のうち西洋音

寺前典子「著者リプライ」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）174-175 頁

楽の合理化はこの過程になぞらえられないでしょうか。すなわち、音楽のリズムが拍子という普遍時間によって区切られ、そのおかげで時空間を隔てた人々と意思疎通を図ることができる。数百年前に作曲されたクラシック音楽を聴くという日常を可能にしたのは、作曲家が鳴り響く音を空間化し楽譜として書き残したからであり、その意思疎通の道具は、合理化の到達点である普遍時間を持つ近代的記譜法で書かれています。

拙著からは「アフリカの響きは聴こえてこない」かもしれません。しかし、これは、人間社会化を音楽合理化になぞらえ、音楽による人間研究の可能性を示すという密かな目的を果たすためであり、その手段には西洋音楽が適役でした。

また評者はジンメルを引用の上、「リズムは生そのものではなく、生の形式である。形式が生を制限し拘束するが、生は形式を通して自己を表現することができる」と記されますが、それは上の合理化過程と重ね合わせられそうです。そして、確かに自然から音楽が生じることはなく、人間技であるリズムや拍子という形式によってこそ、それが可能です。

拙著では合理化過程を論じましたが、他方、人間社会化においては頂点を過ぎると緩やかにリズム的な生活に戻って行く。われわれは、いつか定年を迎え暦や時間の束縛を徐々に解かれて晴耕雨読の日々となり、やがて自然に還る。こうした議論は、高齢社会というわれわれの近未来にかんする議論に接続できるかもしれません。

また、現代的な音楽コミュニケーションにおけるポピュラー音楽の事例も示唆的です。たとえば、ブルースの「ブルー・ノート」音階を奏する奏者は、「正確に半音下の音を演奏することではなく、音の下げ方を微妙に調節し独特のニュアンスを表現すること」に関心を向ける。この「合理化図式ではうまく説明できない」事例から音の微調整という人間技がジャンルを超えて息づくことを学びつつ、楽曲の文化的背景の多様性にも目を向けて参ります。

著者にとってこの書は三番目の子供であり、もう生みの苦しみはないと考えていました。しかし、様々なご助言を頂いたいま感謝と共にリプライを閉じ、Next（Chaplin）の思考を再開したいと思います。

（てらまえ　のりこ　医療法人皮膚科寺前診療所）